

# 福島県・飯舘村

## 「までい」な村づくり

### ◎「までいタイムス」より

福島県相馬郡飯舘村（いいたてむら）。  
福島第一原発の事故により、原発から30～50キロの位置にありながら高濃度の放射能に汚染され、計画的避難区域に指定されて、現在は全村避難中のこの村は、菅野村長の下、



「までい」な村づくり、  
「明るい農村」「日本一美しい村」を実現して注目を浴びていました。

「までい」とは、「真手（まて）」という古語が語源で、左右揃った手、両手の意味です。それが転じて、手間ひま惜しまず、丁寧（ていねい）に心をこめて、つしまし〜、という意味で、現在でも東北地方で使われている方言です。今風に言えば、エコ・もったいない・節約、思いやりの心・人へのやさしさです。そんな飯舘流スローライフを「までいライフ」と呼んでいます。

人口約6千人、3人に1人がお年寄りのこの村で、どのような村づくりがなされていたのでしょうか？

今回は飯舘村の「までい」な取り組みをいろいろと紹介します。

### ◎村の元気なおかあちゃんたちを生んだ「若妻の翼」

村に嫁いできた若いお嫁さんに、ヨーロッパ研修に行ってもらおうという村の事業。

平成元年から5年間開催され、91名のお嫁さんたちが参加されました。この研修に参加した女性たちによって、村には様々な変化が表れ始めたといえます。

ヨーロッパに行くと彼女たちが学んだことは、物事に積極的に関わり、自分なりの考えを持って行動することの楽しさと大切さ。自分で野菜の無人販売所をつくる人、夫まで巻き込んで自家焙煎珈琲の喫茶店を始める人など、自分の力を破って、行動力を手に入れた彼女たちによって、男たちも、村も変わっていったといえます。

### ◎育児休暇「エンジェルプラン」

村の男性職員にも育児休暇を義務付けた制度。「少子化対策の最大の推進策は、男女が手を取り合って作り上げる社会づくりにある」という考えがベースになっていて、妻と夫と一緒に産休を取って、一緒に子育てを楽しもう！という制度です。

### ◎村営の本屋さん「ほんの森いいたて」

平成7年にできた全国的にも珍しい、村が営む本屋さん。ここができるまで村には書店や図書館が一軒もなかったようです。店内では立ち読みならぬ座り読みも大歓迎。テーブルやイスも置いてあり、夕方には学校帰りの子どもたちが宿題をしたり、本を読んだりでも賑やかになるそうです。



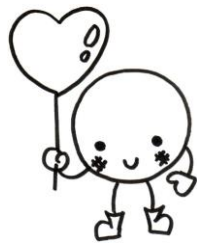
### ◎あいの沢「愛の句碑」プロジェクト

村には特別な観光資源も歴史的な建物もなく、新しく何かを建てる資金もない。あまりお金をかけずに全国にアピ

ルできる観光名所を作れないだろうか。そこで注目したのが「あいの沢」という地名で、「愛にこだわった公園」を作ろうというアイデアが出されました。全国から「愛」にまつわる俳句を募集し、飯舘村で産出される御影石に彫って句碑を作り、遊歩道に並べようという案です。

募集を始めると、なんと1万5千句以上の俳句が集まったそうです。この中から御影石に彫る句を選ぶのに、それまでまったく面識のなかった俳人の黛まどかさんに村長さん自ら手紙を書き、選者をお願いしたそうです。「あいの沢」

遊歩道には、黛さんが厳選した秀句250句が刻まれた御影石が配置されています。



### ◎「思いやりポンプラリー大会」

相手の取りやすい球はどんな球だろう。それを考えながら打ち返し、何回ラリーを続けられるかを競う卓球大会です。親子の部、年配の部、子どもの部に分かれて行われます。会場には、ラリーをカウントする観戦者の声や楽しそうな笑い声が響き、試合をしている一人はもちろん、会場全体が一体感に包まれるような大会だそうです。

相手に思いやりを持つことは、自分と相手のことを考えること。相手のために自分は何ができるか。それは卓球台の上だけではなくて、社会の仕組みも同じ。それが村の目指す幸せな村づくり、つまり「までい」な考え方なのです。

### ◎「村への通信簿」

平成11年から、村政に対する村民から

の評価を明確にするため、「村への通信簿」プロジェクトが始まりました。村民千人に対して、無記名のアンケート用紙を配布し、項目ごとに5段階で評価してもらおう試みます。

福祉、教育、道路行政、役場の職員の対応など、あらゆる分野が項目にあげられています。役場の職員たちは嫌がったそうですが、このアンケートの結果が現実と受け止め、評価の低い項目は、役場の考えと村民のニーズとにズレがあるのであれば、と考え、事前に地区ごとの要望を聞いてから予算を組むようにしたそうです。

### ◎『までいのか』

今回の記事を書くのに参考にさせていただいた本です。この本は、自然とともに生きてきた飯舘村の日常を描いた本として福島市の出版会社で企画され、編集を終えて、販売開始を間近に控えた3月11日に大震災が発生しました。「本を出すどころではない」と一時は出版断念を考えましたが、困難を余儀なくされる住民の励みになればと出版を決意し、菅野村長に急ぎ、「までいのか」が、必ずや新しい日本を再生する基礎になる」とのまえがきを寄せてもらって出版したものです。

この本の販売収益は飯舘村の復興のために役立てられます。

(SEEDS出版、2500円)

